

小学校での取り組み — 授業実践報告

6年生の総合学習 「Take action! われら地球市民」 — 食べることは生きること



ツアー参加体験を活かした授業を実施
©本多良子

食から見る 国際理解

指導 計画

- ・モンゴルの様子から世界の現状を知る。
- ・日本の食事情を知る。(教材としてハンバーガーやカップめんを利用)
- ・世界の食糧分配の現状を疑似体験することで、世界の不公平について実感する。
- ・資源の大切さを知る。
- ・自分ができること、私たちができることは何だろうと考える。

1 使用した教材

- 自作プレゼンテーション資料・ビデオ
「モンゴルでの食事や遊牧民の生活」
- 「世界がもし100人の村だったら」たべもの編 マガジンハウス
- 「世界と地球の困った現実」日本国際飢餓対策機構編
- アクティビティ「ハンガーバンキング」(教材としてお菓子を利用)
- 「地球のともだち ユニセフワークブック」P14,15
「栄養不良をやっつけろ」
- 「地球のともだち ユニセフワークブック」P16,17
「水とトイレがなかったら…」
- 水がめは日本ユニセフ協会から借りる
- 「私にできることは、なんだらう」地球市民村編
- ユニセフ手帳「100円でできること」



ウォーターキオスクで
水くみをする子どもたち
©本多良子

2 学習目標

- ・世界の様子を知り、疑似体験することで、国際社会の抱えている不平等や矛盾に気づく。
- ・自分の生活を見直すとともに、自分のできること・私たちができることを考え、実行する。

3 学習活動 (一部抜粋)

世界と日本の現状を知る

子どもたちが一番興味を示す教材はやはり食べ物である。モンゴルで撮影してきた写真の中から、スーティーツァイ(モンゴルの塩味のミルクティ)や馬乳、羊の肉料理などの写真を見せて、日本の生活とは全くちがう生活をしている人たちがいることに興味を持たせた。いろいろな資料を使いながら世界の現状をとらえさせた。

ハンガーバンキング

「世界がもし27人(学級の人数)の村だとしたら」ととらえ、世界の食糧分配の現状に合わせて、「3」「1」「1/2」の3種類の数字を書いたくじを作り、みんなでくじをひく。一日の食料としてお菓子をくじの数だけ配った。実際にお菓子を食べて、不公平さを感じたようだ。

水の大切さを知る

「地球のともだち ユニセフワークブック」を使って自分たちが一日に使う水の量を考えさせることを導入とした。

次にモンゴルで撮影してきたウォーターキオスクやそこに並んで水をくむ人たちの写真を見せ、実際にポリ容器に水を入れて教室中を全員がひと回りしてみた。また、日本ユニセフ協会から借りた水がめを持ったり、背負ったりしたが、どの子も長い距離を歩ける状態ではなかった。



実際に水を入れたポリタンクを持ち、
水の重さを体験する子どもたち
©本多良子

1回のトイレ使用

で流れる水12リットル^(注)が、自分が持ったポリ容器の水の量と分かり、いかに水の無駄使いをしていたか気づいたようだ。この後、電気や紙など自分の身の回りの生活にも目を向けることができた。

(注)種類によって異なります。

6年生の感想例 (一部抜粋)

これまで、総合の授業で世界についていろいろ勉強した。世界には食べ物が無かったり、水が不足している国があることが分かった。

モンゴルは、運ばないと水が使えない。私たちは、じゃぐちひとひねりですぐに使えるのに。世界では苦労しないと水が使えない所がある。私たちができることは、募金をして世界の人を助けてあげられることかなと思った。これからは、世界の人に役立つようなことをしたい。

ぼくの引いたくじは「1/2」だった。ちょっとしか食べられなくてくやしい。実際に、総合の授業で「1/2」や「1」になった人は、貧しい国の人のが気持ちがわかったから、豊かな国に助けて欲しいと思う気持ちがよく分かる。好きで貧しくなったわけじゃないから。開発途上国に支援するユニセフは、絶対になんともいえないなと思った。

